

「 雪男のはなし。 」

冬ですね。貴方と、私たちの金魚は元気ですか？

私は今、とある北の国にいます。

雪は好き。一面の白に包まれて、世界も自分も新しく生まれ変わったような気がするから。今、ここでは目に映る世界のあらゆる輪郭が白くやわらかくなっています。人々の話す言葉も、真綿にくるまれたような音色がします。

私がみずうみのある村に着いたのは、夜でした。

村の灯がとっくに消えていて、それでも星の光が、たった一軒だけ、まだ灯りをともしている小屋へと、私を案内してくれました。

そこにはひとりの女が住んでいました。毛糸を編みこんだ民族服に身を包み、黒いアーモンド形の瞳をした、美しい人。若い娘のように髪を編みこんでいましたが、ランプの光が女を照らすと、どうやら私の母ほどの年のようでした。

「お入り。そして、火にあたりなさい」

女性は、雪をかぶった私を部屋に招きいれ、シチューをごちそうしてくれました。冷え切ったからだを魔法のように温まる、トナカイのミルクのシチュー。

すすめられるまま食べながら、わたしは部屋のあちこちに目を走らせました。

古い木の糸車。天井から吊り下げられたトナカイの肉の燻製や、玉ねぎ、ハーブ。

編みかけの靴下・・・。

全てが心地よくしつらえられている中、私はコーヒーテーブルに、木の器とスプーン、新しいパンが並んでいるのに気がつきました

「ごめんなさい。お客さんが来るのでしょうか」

私は女に声をかけました。

胸のうちにひっそりと少女を飼っているような女性。彼女は私に、懐かしい何かを想いださせるようでした。

女は薄く微笑んで、答えました。

「そう。大切な人を、待っているの」

「それなら、わたしがいてもいいのでしょうか。おじゃまではありませんか」

すると女は静かに目を伏せ、こう言ったのです。

「もう、遠い約束なのです。叶うかもわからない。あなた、私の話を、聞いてくれますか？」

そしてこれが、女がわたしにくれた、おはなしです。

昔々、私はひとりの美しい雪男を、好きになってしまいました。

私はトナカイを飼ったり、糸をつむいだりして暮らしている、女です。

私が住んでいるのは、湖のほとりにある、ちいさな村です。

この村からはどこにいくにも、湖を越えていかなければなりません。

春から秋のあいだには、渡し舟がでます。

けれども湖が氷に覆われる冬には、凍てつくような風の中を、そりでまる一日かけて、渡らなくてはなりません。

ひそやかな村をとりまく湖はそれほどに巨大なのです。

ですから冬のあいだ、私はほとんど遠出をすることもなく、トナカイたちと家にこもり、ひっそりと雪解けを待つのでした。毎年が、同じ冬のくりかえし。

そう、あの美しい雪男に出会うまでは。

それは、わたしがまだ娘だったころ。この髪が蜂蜜色に輝いていたころのこと。

星までが凍りつきそうに寒いある冬の夜、私はしんと降り積もる雪の音に耳をすませながら、シチューを作っていました。

ご存知でしょうが、心までこごえそうな冬の夜に必要なものといったら、赤々と燃えるストーブの火と、あつあつのシチューにきまっていますからね。

トントントン。

ふうふうと息を吹きかけて、シチューをスプーンに掬いとった時、扉をノックする音が聞こえました。

つららに閉ざされたドアを押しあけると、そこに立っていたのは、一匹の雪男でした。大きなカギ爪を持っているものの、体はそれほど大きくはなく、村の古老から聞いていたほど凶暴ではなさそうです。

毛皮に積もった雪の結晶がきらきらと光るためか、その雪の獣は、私の瞳にはたいそうきれいに映りました。そして何より、新鮮な緑のモミの木の香りをさせていたのも、好ましく思えました。

「ああ、寒かった」

暖かな部屋に招き入れると、ソファに行儀よく身を沈め、雪男は大きく息をつきました。ひとつ、それから、ふたつ。

息をするごとに白く波だつ毛並み。その透き間から覗く雪男の目は、まるで夏の湖のような、すみきった水色でした。

「すごく長い旅だった。すごく寒かったし、遠かった。やあ、この家はなんて居心地がいいんだろ。なんてあったかいんだろ。それになんたかいい匂いもする」

雪男は、大きな黒い鼻を、くんと動かしました。

その子犬のような仕草に、私はくすりと、笑ってしまいました。

「もっと火のそばにお寄りなさい。わたしは、あなたを待っていたかもしれない」

お鍋いっぱいシチューを、私は雪男についてやりました。

雪男は人参ひとかけ、スープの一滴も残すことなく、きれいにたいらげました。

そして、私が歌う子守歌を枕に、眠ってしまいました。

眠りながら、雪男は話してくれました。彼が住んでいた遠い北の国の物語を。

永久に解けることのない氷のお城に、彼は住んでいました。

そこにはオーロラ色に光る花が咲く美しい花畑もありました。

「でもそこにはどんな友達も呼ぶことができない。僕の国は寒すぎて、あんなに強いシロ

クマだって心臓が凍えてしまうほどなんだ。僕がおもてなしできるたったひとつの料理だって、氷のマシュマロだけなんだから」

雪男は、本当にひとりぼっちだったのです。

「ぼくが泣いた時に落ちたなみだが、雪の花に生まれ変わるんだ」

その洞窟には千の花が咲いていると雪男は言いましたから、きっとずいぶん悲しかったことでしょう。

「湖がおっている間は、遊びにいらっしやい。貴方がさみしくなったときは、いつでも」私の声は、まるで春を告げる鐘のように響きました。

あたたかな小屋で冬ごもりしているとはいえ、寒くてさみしかったのは、私も同じでしたから。

思えばその時、私はもう、雪男に恋をしてしまっていたのかもしれない。

「うん。きっとまた来るよ。森には素敵なモミの木が生えている場所があるから、ぼく、いつかおみやげに持ってくることにしよう」

次の朝、静かな声でいとまを告げ、雪野原に点々と足跡を残しながら、雪男は湖の彼方にある、森の果てと帰っていきました。

別れのとて、雪男は白くなめらかな毛の下から、すきとおった瞳を覗かせると、じっと私を見つめました。

私の心臓は早鐘のように鳴り響いたので、雪男の形よくとがった耳にとどいたのではないかと思うほどでした。

それ以来、雪が降るたび、私は雪男を恋しく思うのです。

シチューを作り、白くけぶった窓に鼻をくっつけては、待ち遠しく想ってしまうのです。

あのモミの木の約束を・・・。

ああ、また、雪が降りはじめました。星も、こおりついて今にも降ってきそうに見えるでしょう？

さあ、お湯をわかしておきましょう。

今夜あたり、雪男はきっとやってくるでしょうから。

これが、女がわたしにくれたお話です。雪男の物語を聞くうち、私は思い出しました。

貴方と出会った頃、出かける日には、いつも雪が降っていたこと。

風になびくマフラーが頬にあたる感触や、歩きながら飲んだコーヒーの味までも。

たぶん、女と私は同じ「雪男に恋をしてしまった」もの同士なのでしょう。

でも、もしかすると。私も貴方のもとに何かの約束を、置き忘れてきたのでしょうか。

もうすこし旅をつづけながら、このことについて考えてみようかと想います。

そう、それから今夜、オーロラを見ました。

この土地には、オーロラは亡くなった人たちの機織りだという言い伝えがあるそうです。
光を糸として、地上に残してきた思い出を、そっと織りこんでいるのだと。
みどりに。あおに。あかに。織りなされる空を見ていたら、ひとつの詩が生まれました。
貴方にこの詩を贈ります。

「みずうみ」

わたしの心にさざなみを立てるもの
それは きっと貴方でしょう

みずうみのやうな水色に
花のやうな薄紅に
ため息のやうな白に
夜のやうな群青に
蜂蜜のやうな金色に

貴方を想うたび
わたしの心は、波だつのです

いつか
月のきれいな晩にいらしてください
わたしの心の汀まで

それでは、また手紙を書きます。どうか、良い夢を。